

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第2回期日(20210902)提出の書面です。

令和3年(ワ)第7645号 「結婚の自由をすべての人に」訴訟事件

原告：山縣真矢 外7名

被告：国

原告福田理恵意見陳述要旨

2021年9月2日

東京地方裁判所民事第44部甲合議1A係 御中

原告 福田理恵

原告福田理恵の意見陳述の要旨は、以下のとおりです。

記

原告の福田理恵です。原告席に座っている同じく原告の藤井美由紀と、2016年から一緒に暮らしています。

私が初めて同性に恋愛感情を抱いたのは高校生の時でした。気づくと、その友人の後ろ姿を探し、見つめるようになっていました。「もっと近づきたい」、「手に触れたい」、という抗えない感情が沸き起こることに困惑し、一時的なもので終わりますように、と祈るような気持ちでいました。

大学時代は無理をして男性と付き合いました。「できることなら男性を好きになり、結婚して、子どもを産みたい。」という思いがあったからです。でも恋愛感情の高揚感が生じることはなく、目で追うのは女性、ときめくのも女性でした。

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第2 回期日(20210902)提出の書面です。

社会人になってもそれは変わりませんでした。20代半ばの時に女友達から告白されたことをきっかけに、初めて女性と付き合い、女性にしか恋愛感情が向かないこと、それは一時的なものではないことを認めざるを得ませんでした。それは諦めに近い感情で、同性を好きになる自分を肯定することはできませんでした。誰かにありのままの自分を受け入れて欲しくて、親族に、付き合っている人がいてその人は女性だと伝えました。その親族は海外生活が長く、友人にゲイもいると言っていたので、「理恵はそのままで全然問題ないよ！」と言ってくれると信じて疑いませんでした。ところが思いも寄らず、「友達はいいけれど、親族にはいて欲しくない、精神的に異常だと思う」と泣きながら言われてしまい、私は深く傷つき、消えていなくなってしまうと思いました。

それ以降は、二度と傷つきたくないという思いから、自分を殻の中に閉じこめてガチガチに守り、「私は異常じゃない」、と自分で自分に言い聞かせながら生きてきました。家族や友人、会社の同僚含めて、周囲には本当の自分を隠し、隠すために恋愛関係や週末の過ごし方も嘘をつき、次第に嘘をつき続けるのにも疲れ、周囲を遠ざけるようになりました。家族とは特に疎遠になっていきました。カミングアウトをした時に親族が私に向けた嫌悪感に満ちた目を、また向けられたら、必死に守っていた心が砕けてしまいそうだったのと、親族が両親に告げ口をしているかもしれないという恐怖があったからです。このままひっそりと一生を過ごすのだろうと思っていましたが、そんな私の人生が変わる出来事が40代に入ってからいくつも起きました。

40歳のとき、乳癌が見つかりました。美由紀と知り合ってから約半年後、付き合い始めて1ヶ月半ほどの頃でした。面倒だから距離を置かれると思っていたのですが、全くそんなことはありませんでした。がんになってしまったという事実によって圧倒されて何も手につかなかった私に代わり、美

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第2 回期日(20210902)提出の書面です。

由紀は、率先して信頼できる病院と執刀医を探し、予約の取り方など全て調べてくれました。そして、家族と疎遠だった私を、手術の付き添いから術後の闘病に至るまで、大きな笑顔と元気いっぱいの励ましでずっと支え続けてくれました。

手術の直後、全身の激しい痛みと猛烈な吐き気で全く動くことができなかつた私を、美由紀は朗らかな笑顔で看病してくれました。水を含んだ脱脂綿で喉を潤してくれたり、口の中から痰をかき出してくれたり、体を拭いてくれたり、嘔吐する私の背中を「吐いちゃいな」と優しくさすったりしてくれました。私の中で、美由紀は一気に恋人から家族になり、この人と一生を添い遂げたいという気持ちが芽生えました。

手術の後2、3年ほどは体調不良が続きました。再発が頭をよぎって不安に駆られた時も、仕事を続けられないかもしれないと弱気になった時も、美由紀は屈託のない笑顔で「大丈夫、大丈夫！」と励ましてくれて、何度も暗闇から私を引っ張り上げてくれました。いつも明るく私を支えてくれている美由紀と、一生を添いとげたいという気持ちは確信に変わり、私が住んでいた持ち家で一緒に暮らし始めました。

共に生活するようになり、家が癒しと安らぎの空間になりました。私が以前から子どものように育てていた猫2匹に、二人で愛情を注ぎ、週末は二人で家をきれいにし、二人でスーパーに買い出しに行き、一緒にご飯を作るようになりました。家族として暮らしていく中で、「自分に万が一のことがあっても、家族として暮らし愛情を育んだこの家で、引き続き美由紀が暮らせるようにしておきたい。」「結婚できたら美由紀は確実に相続できるのに。」「元気なうちに美由紀と結婚し、美由紀が我が家に住み続けられる安心感を得たい。」、そう思うようになりました。

また、乳がんの手術をした約3ヶ月後に、母を亡くしました。疎遠になってはいましたが、心の中には常に母のことがありました。母は自身

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第2 回期日(20210902)提出の書面です。

の思いを私に押し付けたことがなく、女の子らしくしなさい、とか、結婚しなさい、など一切言ったことがありませんでした。20代の後半に女性と一緒に住むことを告げた時も、母は理由を聞いたり、こうしなさいと言ったりはしませんでした。常に私の意思と選択を尊重してくれたことが、最終的に美由紀との出会いに繋がったので、母だけには、「ずっと何も言わずに見守ってくれていてありがとう。おかげで、美由紀という、一生を添い遂げたいと思うほど素敵の人と出会うことができたよ。今私は幸せだよ」と伝えたいと思っていました。でもやっぱり傷つくのが怖く、終に本当のことを話す勇気を出せないまま、母は持病の悪化で亡くなってしまいました。

癌になり、人生は思っていたほど長くないのかもしれないと死を身近に感じるようになったこと、一番伝えたかった母にはもう永遠に伝えることはできない現実に打ちのめされたことから、「これからは誰に何と言われようと、正直に自分らしく生きていこう。」と強く思いました。

また、42歳の頃に、当時勤めていた会社で同性パートナーシップ制度が導入されました。その掲示板を目にした時に、感激のあまり胸が締め付けられました。それまで社会のどこにいても居場所を見つけられませんでした。人生で初めて「ここにいて良いんだよ」と受け入れてもらった感覚を覚えたからです。そのような会社からのメッセージによって、私はありのままの自分を肯定できるようになり、それは自分らしく生きていく力強い後押しとなりました。

それからは、自分らしく生きていくため、また、自分がいなくなった後の美由紀の生活を守るために、できることはしてきました。当時勤めていた会社には同性パートナーの申請をし、今の会社に転職する際はカミングアウトをして本当の自分を受け入れてもらった上で入社し、美由紀を配偶者とみなしてもらいました。美由紀に相続できるように10万

【有償配布 や Web(ホームページ, ブログ, facebook 等)へのアップロード・転載はお止めください】

【リンクはご自由にお貼りください】

「結婚の自由をすべての人に」東京第二次訴訟(東京地裁)第2 回期日(20210902)提出の書面です。

円以上の費用をかけて公正証書も作成しました。勇気を出して友人や同僚にもカミングアウトをしました。同僚は「福田さんは福田さんだから！」と言ってくれました。アメリカに住んでいた頃と同級生は「私の13歳の娘もレズビアンだよ。娘には、誰を好きになっても良いんだよ、と伝えてるんだ。太平洋の反対側から応援しているよ！」と言ってくれました。みんなの反応は、20年近く殻に閉じこもっていたのが拍子抜けするくらい好意的でした。私のことを「異常だ」と言い放った親族も、「あの時は未熟だった。ごめんなさい」と謝ってくれました。今では週に2、3回、美由紀と私にご飯を作ってくれる仲です。20年という年月の中で、会社や自治体で同性パートナーシップ制度ができたり、海外で同性婚が法制化されたりと、世の中の風景が変化すると共に、親族の中でも同性愛者に対する意識が変わっていったのだと思います。

できることはしてきて、周囲にも美由紀との関係を認めてもらいましたが、法律上の夫婦と同じ扱いを受けられないため、常に不安があります。個人の努力でできるのはここまでが限界です。

私は時々考えます。同性婚が実現している日本で生まれ、生きていたら、どんな人生だっただろうと。好きな人ができた時に自分は異常かとも思い悩むこともなく、ただ単に好きだなあという思いに浸り、恋人ができたらひた隠しにして嘘を重ねることもなく、ただ恥ずかしげに友達に紹介し、一生を添い遂げたい人と出会った時に、母親に伝えられずに永遠の別れとなってしまうこともなく、嬉々として報告し、そして結婚をして、自分の命が尽きた後も美由紀は思い出の詰まった我が家で暮らしていけるだろうかと、心配をすることもなかつただろうと。これからの日本に生まれてくる LGBT には、「普通」の人生が待っていることを、私は信じています。

以上